

## 瀧井孝作の王朝小説

——「中務大輔の娘」の牽引した「六の宮の姫君」物語の系譜——

町田 栄

### 1

瀧井孝作に客観小説、それも数篇の王朝物があることは、あまり知られていないようだ。各種の現代文学全集などの内の、瀧井集に採録されていない。また、論及したものがあるか、どうかも寡聞にして知らぬ。

この豊饒な作家は、つねに、『折紫句集』（昭六・八・五刊 やほんな書房）の俳人折紫であり、身辺・師友・俳句・魚釣り・能楽などに関する各種の随筆集を持ち、「直接経験を正直に一分一厘も歪めずこしらへずに写生」した清列、至純な私小説『無限抱擁』（昭二・九・二〇刊 改造社）から、父親ものの集成『父』（昭一六・五・二三刊 高山書院）を経て、『俳人仲間』（昭四八・一〇・一五刊 新潮社）にいたる自伝の作家である。いわば、それはあくまでも、瀧井文学の堂々たる大道であるだろう。——狭い露地の片隅にも、目を配り、

凝らして見つめなければなるまい。意外に、生産性に富んだ播種のなされているのを発見するのだ。

四十八歳のおりの刊行に、つつましくも『稚心』（昭一七・四・一五刊 小山書店）と名づけた作品集がある。標題の由来は、巻末の「後記」に「この短篇集の『稚心』といふ題は、この一冊の各々の短篇のどれにも、若芽のやうなおさなごころが各々に共通にあらはれてゐるやうで、かく名付いたのであります」と、説明されている。謙辞には相違ないが、むしろ、独得の「初ぶい」気持を自作に寄せ

ているのだ。さらにことばを継いで、「各々の作品は、おさなごころを主題として書いたかのやうに思はれる位であります」と、みずからの初心を顧みて述べる。四六判、表紙は薄茶の紙装、丸背、背文字は白ぬき。ジャケッ、カバーの類の有無は不明。函付というが見。本文三四〇ページ。若々しく、端正な造本で、好ましい。

収録作品は全十五短篇、すなわち、順序に「中務大輔の娘」「舎

人達の失敗」・「琴の物語」・「節分」・「別荘番」・「仮寓」・「故郷の話」・「田舎の父」・「山中釣遊」・「澄む」・「松倉」・「初奉公」・「仏法僧」・「狐」・「トシヨ」、それに「後記」がついている。大半は試行に満ちた最初期の創作を集め、清新で、意欲的な感じが漂う。ことさらな、何らかの企図のこもった編成ではないらしい。統一性もない。ただ、「若芽のやうな」を実感させる、さわやかな作品集である。

注目すべきは、やはり、巻首に並ぶ特異な三王朝小説であろう。各作品について「後記」中の自解のこぼれを引き、初出・典拠などを示す。

「中務大輔の娘」は、内気な素直な女性を描いてみたのです。自己のない従順な内気な女性は、平安朝のむかしから怒しまれ隣まれてゐたやうで、これを描いてみたのです。——大正十(一九二二)年十二月一日付『表現』(二松堂書店発行)第一巻第二号に発表。原典そのほかは後述する。

「舎人達の失敗」は、プロレタリア文学の盛んに云はれた時分に昭和六年に書いたもので、労働争議の失敗の事は平安朝時代にもあつたらしいので、それを写し出してみました。——昭和六(一九三二)年四月一日付『文芸春秋』(文芸春秋社発行)第九年第四号に発表。誌上、本文末尾に「昭和六年二月」と執筆年月を付記している。出典は『今昔物語集』巻第二十八「越前ノ守為盛、付六衛府官人語第五」全文を主軸に、巻第二十三「兼時ト教行トノ鏡馬ノ勝負ノ語第二十六」・巻第二十八

「近衛ノ舎人共稲荷ニ詣テシニ、重方、値、女語第一」・巻第十九「下野ノ公助、為父教行被打不遜語第二十六」などの挿話を採用して構成している。

「琴の物語」は、芸術の修行、芸を身につけると云ふこと、是はどのやうなものか、この点を主に語るため平安朝の宇津保物語の中から引き出したのです。——昭和七(一九三二)年四月一日付『婦人サロン』(文芸春秋社発行)第四巻第四号に発表。なお、誌上では原題「木洞物語」、それに「(と)しかげの巻」と添え書きがあり、目次のページには「木洞物語(童話)」とある。出典は『宇津保物語』の「俊蔭」冒頭部より抄出。「稚心」収録に際して改題する。

ほかに、「純潔——『藪の中』をめぐりて——」(昭三六・一・一付『改造』第三十巻第一号に発表)という「エッセイと小説とつきまぜたやうな」と自称する短篇もある。芥川龍之介とその「藪の中」をめぐり、自身の最初の結婚相手、志賀直哉の「雨蛙」・「暗夜行路」を語って、「純潔を失つた女、もはや純潔でない女」に悩んだり、制作を試みたりしたことなどを回想する。中に『今昔物語集』巻第二十九「具妻行丹波国 男、於大江山被縛語第二十三」を現代語訳して、この説話を「その時代の世俗の、都の優柔の男を揶揄した、一つのユーモア」と解し、結末は「憐れな夫婦共に心持をとり直して、打のめされた気持を引立て、連立て行く、といふ風に翻譯してみ」た部分が挿入されている。小説集『野趣』(昭四三・八・一刊大和書房)に収めるが、その巻末の「後記」に、

「純潔」は、小説のテーマとしては、女性の純潔の尊厳を主張したつもりだが、小説だか論文だか、何か混淆した、藪の中のやうな感じだ。私としてはわざとハメをはずした試作だ。

と、自解している。

右の三作品中、ここに取り挙げて、考察するのは『稚心』の巻頭小説「中務大輔の娘」である。その初めて収録した作品集は菊半裁判、薄山吹色の紙装、角背、アンカット本のシリーズで知られる『新進作家叢書33 良人の貞操』（大正二・七・二三刊 新潮社）である。

このときに、本文末尾に「(大正十年九月)」と執筆年月が明記される。この短篇がもっとも優れているばかりでなく、他の二作と違って、大正十年度の制作・発表であり、『今昔物語集』の説話を大量に、大胆に取り入れた実験的、独創的な試みを見せている点に、関心せざるをえないからである。

## 2

——当時の瀧井も、芥川龍之介のいう「田端人」のひとりである。「田端」の芥川を圍繞した、新進の作家や美術家たち、その最初期のひとりに数えられるだろう。大正十年三月に、瀧井と妻とその母の一家は、東京府下豊島郡滝野川町田端五七一番地に入居する。芥川を慕ってのことに違いない。「ねかるみの路を前にしたのは、俳人瀧井折柴の家」（東京田端より）とうたわれた借家である。『無限抱擁』には、東京市本郷区湯島三組町から転居して来たとき、妻の「松子の母はこの田端の高台の奥を辺鄙故心細がった。

『山の中だネえ』左う辺りの物が考へられた」と、嘆く場面を寸描している。翌十一年、妻りんの死(大正二・二・一)の直後、四月には志賀直哉を追って、千葉県我孫子へ、さらに京都へ、奈良へ転居してしまふ。

瀧井の田端住まいは、わずかに一年間であるが、芥川との親交は大正八年の春、『時事新報』の文芸部記者をしていた頃に始まっている。鎌倉を引き揚げた芥川が、田端の養父母の家に入って、二階の書齋に「我鬼窟」の扁額を掲げ、毎日曜日を面会日と定めた、当初からの常連訪問者である。『折柴隨筆』(昭一〇・九・二〇刊 野田書房)中の「小惑」は「我鬼窟」通いの楽しみを回想しているが、濃密な「制作欲の空氣の充ち／＼た書齋」の状況を伝え、それは主客たちの「修羅道だった」の一語もつけ加えている。

大正八年から三年間は、瀧井にとって『無限抱擁』の時代であり、『時事新報』・『改造』記者から職業作家へ、俳句から小説へ、芥川親灸・蟬脱から志賀傾倒への転機である。

周知の通り、芥川は歴史小説に新生面を開いて、脚光を浴びた作家である。ことに、『今昔物語集』や『宇治拾遺物語』ほかの説話を発掘して、犀利な現代的解釈による知的操作をほどこして、それらを作品化している。王朝説話に依拠する全十六篇のうち、「青年と死」(大正三・九『新思潮』)・「羅生門」(大正四・一一『帝國文学』)・「鼻」(大正五・二『新思潮』、同・五『新小説』に再掲載)・「芋粥」(大正五・九『新小説』)・「運」(大正六・一『文章世界』)・「偷盜」(大正六・四、七『中央公論』)・「往生絵巻」(大正一〇・四『国粹』)・「好色」(大正

○・一〇『改造』・「藪の中」(大一一・一『新潮』)および「六の宮の姫君」(大一一・八『表現』)の十篇にのぼる制作が、いわゆる「今昔物」で占められる。

芥川と瀧井との文学的交渉の実質は、瀧井が作句の、芥川が創作の手ほどきをする、相互の師弟、切磋の關係にある。芥川が、前掲の「俳人瀧井折柴の家」と記述して、小説家瀧井孝作と記さぬゆえんである。なるほど、瀧井に向かって小説作法を教え、『今昔物語集』に目を開かせたのは芥川である。が、芥川と異なる資質の瀧井の『今昔』に会得は、芥川の予期せぬところに表われたのではないが、一応、仮定してみる。

大正八年から芥川龍之介に直接教へられる所が多かつた。『今昔物語』の美しさ鮮やかさが分つた。西鶴に付いて、芭蕉に付いてよく語合つた。今昔物語、西鶴、芭蕉などはこの時分から以後も時折くり返して読み、生涯の伴侶になつた。(私の読書遍歴、昭二八・九・一四付『日本読書新聞』)

と、瀧井はうち明ける。また「文学的自叙伝」の「ぼくの文章は『今昔物語』と『西鶴全集』と『夜の光』(注志賀直哉の作品集、大七・一・一六刊 新潮社)等の影響が現はれてゐる」に、重ね合わせられる。首肯できよう。芥川に『今昔物語』ほかを血肉化し、自身の文体化することは不可能事である。——右の一節は、隨筆集『生のまま素のまま』(昭三四・一一・五刊 桜井書店)に収録される。同題のエッセイに、「迫真力」と「個性の強い抵抗力」とを必要とする「自然の純粹」さを力説する。瀧井の希求する真骨頂を語つた標

題である。「教へられる所が多かつた」と「分つた」という自得との差異は、問われなければなるまい。

「今昔物語」の美しさ鮮やかさの含意は、芥川が後年という「美しい生ま々々しさ」(「Pratality (野性)の美しさ」)「優美とか華奢とかには最も縁の遠い美しさ」に敷衍できるかも知れない。「今昔物語鑑賞」(昭二・四・三〇刊 新潮社『日本文学講座・第五巻』所収)に詳述する、「やつと『今昔物語』の本来の面目を発見」したという、享受の到達点である。しかし、私見によれば、この種の素朴な、たくましい「美しさ」を、『今昔物語集』の自然の美しさを、少しくも、作品化しようと試みたのは王朝「今昔物」の掉尾の作、「六の宮の姫君」が初めてであり、最後である。ついに、かなわない。かつて、意識して人工的、技巧的、解枳的な方法、そのもつとも巧緻をきわめた「藪の中」、——を駆使している限りは「発見」できず、作品化もならぬ種類の「美しさ」であるからだ。

或異常なる事件を不自然の感じを与へずに書きこなす必要上、昔を選ぶと云ふ事にも、さう云ふ必要以外に昔其ものの美しさが可成影響を与へてゐるのにちがひない。しかし、主として僕の作品の中で昔が勤めてゐる役割は、やはり「ベルトが糸を紡いでゐた時に」である。或は「まだ動物が口を利いてゐた時に」である。(昔より)

方法に腐心して、「昔其ものの美しさ」に及ばない、もしくは拒絶する資質の性向を告白している。が、——いまや、その「昔其ものの美しさ」、つまり『今昔物語集』の自然の美しさに開眼する。

この転換はなにを契機とするのか。「六の宮の姫君」評価は、不徹底なその歴史離れと、歴史其儘とを論拠にして二分されている。むしろ、双方の間に、不安定に揺らいでいる作品という方が至当だろう。

転換に努めた「六の宮の姫君」は、それ以前の「今昔物」と一線を画す。瀧井の「中務大輔の娘」がその位置にあり、芥川を促がしたとすることは可能だ。——ものあわれ系の説話類に、芥川の涉獵が到らぬはずはない。瀧井に熱っぽく鼓吹したろう。都会人芥川と飛騨高山の野人とは享受が異なる。瀧井の気質はためらわず、粗野な「美しさ」の核心に、直截に参入してしまう。素材を提供した芥川は、逆に『今昔物語集』の「本来の面目」をほかならぬ瀧井に教えられたのである。

すでにして、「中務大輔の娘」は芥川の『今昔物語集』関心に触発された制作であることは明らかだ。もっと積極的に、芥川の示唆なり、教示なりの所産といってよいだろう。しかし、その半年後に、同じ発表誌『表現』上に「六の宮の姫君」を見ると、芥川が「中務大輔の娘」を充分に視野に置き、しかも刮目した証としなければならぬ。

——素材に懸隔のある「舎人達の失敗」・「木洞物語」は、執筆・発表の大幅に遅れている点で、直接、芥川の影響下という制作事情ではない。

「中務大輔の娘」は、『今昔物語集』巻第三十「中務ノ太輔ノ娘、成近江郡司婢語第四」を典拠の主軸として構成された短篇小説である。同様に、この優れた説話を作品化した堀辰雄の「曠野」があまりに有名であるが、実は身近かに先駆的な制作が存在していたのである。「曠野」は昭和十六（一九四一）年十二月一日付『改造』（改造社発行）第二十三卷第二十三号に発表され、作品集『曠野』（昭一九・九・二〇刊 養徳社）に収録する。

言うまでもなく、堀も、芥川晩年の「田端人」のひとりであり、最愛の弟子である。——旧制一高の学生堀が、室生犀星を通じて芥川に紹介されたのは大正十二年十月のころらしい。芥川家は関東大震災をまぬかれている。知遇をえた堀は翌年秋から一時期、田端の下宿屋「紅葉館」に入居する。翌十四年のひと夏は軽井沢に滞在して、芥川や片山広子、聡子母子と親しく交際し、後年、「ルウベンスの偽画」（昭五・五）作品、ただし、それ以前に「断片」として二回発表、「聖家族」（昭五・一一）『改造』に小説化する体験を持つ。芥川の死後、全八巻『芥川龍之介全集』（昭二一・一・三〇・四・二・二八刊 岩波書店）の編集に従事（昭二一・九・三・七）している。「曠野」の冒頭の一文は、次のように語り始める。原話に記述されていない部分を書き添えたのである。

そのころ西の京の六条のほとりに中務大輔ながしと云ふ人が住まつてゐた。

主人公はこの「中務大輔の娘」、すなわち、「六条のほとり」の邸に養われた「六の宮の姫君」に仕立てられているのだ。「六の宮の姫君」と云ふのは、その土地の名前に拠つたのだつたと、芥川作品という。原典が「今昔、六ノ宮ト云フ所ニ住ル宮原ノ子ニ、」を採つたものである。瀧井の「中務大輔の娘」と堀の「曠野」とは前記を、芥川のは『今昔物語集』巻第十九「六ノ宮、姫君ノ夫出家セル語第五」を典拠にしている。堀は、ここに両説話を結び着けておく。構成的な瀧井作品とは対照的に、「中務大輔娘、成近江郡司婢語」の原話を、以下に、忠実になぞって行く「曠野」であるのに。

——現代小説化に、原話が出来機縁譚であることは支障とならないのか。芥川作品はその部分を捨象しえた。しかし、「曠野」の主人公設定に、別個の説話をもつて連結しているとは、どういふことなのか。

堀の「六の宮の姫君」評価は異様に高い。昭和四年三月に、東京帝大文学部国文科を卒業する際に提出した卒論「芥川龍之介論——芸術家としての彼を論ず——」中に、

僕は再び繰返すならば、この作品は彼の歴史小説中最も完成されたものであり、その故に歴史小説中の最高位を占めるべきものである。「鼻」その他の彼独自の逆説的な心理解剖の妙は無いが、いかにも華やかなしかも寂しい、クラシックの高い香を放つた、何とも言へず美しい作品である。彼の最上の傑作であると言はなければならぬ。

と讚美する。いかに篤い敬愛の念を捧げた師への論といひながら、

「六の宮の姫君」一作を指して、森鷗外を含めた「歴史小説中の最高位」と称し、芥川文学中の「最上の傑作」と称するのは、不当な過褒になるだろう。他の芥川作品が色あせてしまうほどな偏愛、いわゆる鼻眞の引き倒しである。——全体に、堀の痛切な主情の濃く流れる、この卒業論文に客観性を求めることは慎しまれる。とくに、右の言辭にはことさらな意味合いがなくもない。

自作「曠野」をして、芥川の「六の宮の姫君」に連らねて、その正統な後継作と任じる意思は明らかである。また、「中務大輔娘、成近江郡司婢語」の小説化は永い／＼宿願でもあったのだろう。もちろん、瀧井作品の存在を了知した上で、である。

——一連の堀の言動は、瀧井の「中務大輔の娘」と芥川の「六の宮の姫君」との間に、ある角逐のあったことを照し出す。猜せられるのだ。前記の回想「純潔——『藪の中』をめぐりて——」によると、その原典「具妻行丹波国男、於大江山被縛語」の着目と小説化の計画は、まず、瀧井のものであった。「このやうな貞操の純潔の失はれた夫婦は、この後何ういふ夫婦生活をして行くか、この場合から尚ほ後での夫婦の心持が小説に書ける」と云つて、私は、純潔を失つた女、もはや純潔でない女、これを主題にした小説」を作りたいと、腹案を芥川にうち明けたという。「女人上りの女」と結婚した、「良人の貞操」の作者には切実な動機があったからである。

「当時、私は芥川さんに、自分の考へた小説の材料や主題など、折々話」す、隔意のない間柄だ。瀧井の構想が成稿する前に、「今昔物語や宇治拾遺から取材した小説は、以前から出して、お家の芸」

とする芥川は「藪の中」を執筆し、誌上に発表してしまう。一読すると、「私の考へてゐたのと凡そ別の小説と分つたが、私はこの時この題材は書けない気がしました。私が書けば二番煮じで、この材料の純潔性も、もはやなくなつた」と感じ、放棄したとある。「芥川さんは他人の材料で書く癖」もあり、「トロッコ」・「一塊の土」・「仙人」・「庭」などを挙げてゐる。

してみれば、芥川の愛弟子が、すでに作品化されている「中務大輔の娘」の原典に対して、しかも、それを「六の宮の姫君」につなげて小説化したのは、あたかも、如上とは逆の事情でもあつた、とすることか。芥川側からは、自分の「中務大輔娘、成近江郡司婢語」の小説化に先んじて、瀧井に仕送げられてしまつたという競合である。もつと単純に、瀧井が「今昔物」を執筆したこと、つまり、芥川の「お家の芸」を侵犯したことの不快さかも知れない。これを芥川が堀に語つたものか、どうか。あるいは堀が師の胸中をはかつて、ひとり決めたものか。芥川にも、堀にも、関連する証言はない。

少なくとも、「中務大輔娘、成近江郡司婢語」と「六宮姫君夫出家語」との二説話は特定して、瀧井・芥川のままに並存していたしなればならぬ。熱い視線を浴びた好飼だったのである。二人の作家は各個に典拠を求め、それぞれを小説化したのではない。共通して着目したのである。そして、おそらく曲折に満ちた前者の方が、その制作に小説家の嗜欲はそそられることだろう。殊に、ストーリーテラー芥川好みである。出遅れた芥川の「六宮姫君夫出家

語」の採用は、余儀なくつた次善の策に違いない。角逐の後遺症を残すのである。——時期的にいえば、「曠野」の発表直後に、「中務大輔の娘」を冠して旧作群を集めた『稚心』の刊行がある。この事実は偶然というよりも、堀の意向を受けとめた瀧井の、呼応の姿勢を看取できよう。

〈芥川の『今昔物語』を中心に、芥川・瀧井・堀の三者相互の芸術的琢磨が演じられたのである。それは三制作を、相手を意識し合つた個性豊かなものに育て上げるだろう。さらに五年後、菊池寛の『新今昔物語 六宮姫君』が参加する。これは昭和二十一（一九四六）年十一月一日付『苦楽』（苦楽社発行）創刊号に発表される。以下、すべて『新今昔物語』の角書きをつけて「狐を斬る」・「学者夫婦」・「大雀天皇」・「心形問答」・「三人法師」・「龍」・「伊勢」・「馬上の美人」を翌二十二年七月号まで同誌に連載している。収録作品集は『好色物語』（昭二六・九・二五刊 二十世紀日本社）で、『古事記』・『今昔物語集』・『宇治拾遺物語』・『古今著聞集』その他の古典に取材した全三十話を納めた、菊池没（昭二三・三・六）後の刊行である。その巻末に河上徹太郎が「あとがき」を付け、「少く共この不正規な文筆活動をした天才的文学者の晩年の一と時を異常な親しみある明るさで照す名篇であることは確かである」と、結んでいる。

芥川とその周辺の作家による女主人公の物語群は、ひとつの系譜を形成している。

「六宮姫君夫出家語」の世界は、牢固に組み立てられた出家機縁説話である。標題に見る通り、六の宮の姫君の「夫」が「出家セル語」、男を主人公としてその出家の機縁を物語る。男は愛する女の遺体を抱いて、到来した死の意味、死の必然性を悟る。原話に「男暫ハ『生ヤ返ル』ト抱キタリケレド、ヤガテ水エ瘡ニケレバ、此ク見成シテ、其レヨリ家ニモ不行シテ、愛右護ノ山ニ行テ髻ヲ切テ法師ニ成ニケリ」（傍点町田）とある。この説話は「姫君」の出自から始めて環境、行路を語り、一見、標題に反して主人公に見誤るばかりだ。が、ゆえないことではない。遠い前代から時連に見放され、永く世に交らうこともなかつた、皇孫四世の末裔「六宮姫君」が既定のコースをひたすらに零落を極めて、死んでしまう。両親の急死に象徴される、生命力を欠いた名門の最後の一人が滅びに向かう途次、しばらく、かかわった「夫」には「姫君」の負う悲痛な宿命を取り除くことなどできない。「二十余歳許ナル」受領の子ならずとも、誰しも、傍観するより他にあるまい。女に再会した男が出家するのは、窮迫にまかせて薄幸の生涯を閉じざるをえない女を目のあたりにして、不可避の無情を感じたからである。男の不実、非力のゆえとか、陸奥・常陸に安穩な歳月を送って、京の女をかえりみなかった自責の念とかのゆえではない。

この説話を換骨奪胎して、現代小説化するのには容易な作業ではない。芥川の透徹した鑑賞力は、かえって原話の美質のみ理解され、

創意の働くところを失なうだろう。物理的にいってしまつと、「夫」を主人公の場からはずせば、自動的に、出家機縁も捨象できよう。「六宮姫君」を主人公に改めて、再構築する破壊的な契機はどこからもたらされたのであろうか。堅固な説話中に見出すことは難い。つけ入る余地はない。やはり、外部から持ちこまれたものによらねばならぬ。「中務太輔娘、成近江郡司婢語」と、それを主な原典とする瀧井の「中務太輔の娘」とがそこにある。

「中務太輔娘、成近江郡司婢語」は女主人公の数奇な、落魄の短い後半生をドラマティックに描いている。相愛の男女が飽かぬ別れをした後に、明暗を分けた人生をたどって行く。別れたのは女の、男の将来を計らつてのことである。案の条、かねての衰微の度を増して、「中務ノ太輔ノ娘」は困窮し、「近江ノ郡司ノ婢」に流浪、転落する。そして新国守に昇任した男に再会し、もとの「夫」と知つたときに死んでしまう。

二つの説話は併読することが可能だ。相違点よりも類似点、共通点が目につく。それは「女」像の上に重なるだろう。富貴とは無縁な中流貴族の一人娘が、相ついで両親を失なう。後見をする有力な親戚もないらしい。援助の手はどこからも差しのべられない。消極的、所与的なのはかない生は、結局、苛酷な運命にさらされて終わる。女の最期は「只水瘡ケレバ」とあつて、これも共通しよう。男を運わせたときも、再会も、活力の回復にはならぬ。ただ、つたない「身ノ宿世思ヒ被遣」る諦観を抱いているだけだ。悲涼の行路を描いて、哀切感深い。——別個の説話は女性像に限って、



互いに補い合つて読むことができ、通行して明確な性格を形づく  
る。

さて、瀧井は「中務太輔娘、成近江郡司婢語」を探り、自作の骨  
格に用いる。が、そこに大胆な構成変更をほどこし、他の説話四篇  
を投入するという、破天荒な構想を盛つた小説化を「中務太輔の  
娘」で試みている。斬新なというより実験的な、意欲作である。

昔、近江の或所にての出来事で、——其処の郡司某の婢女の  
中に、京生れの婦人が一人交つて居た。年は二十四五に見え  
た。

冒頭、零落し果てた「京」が設定されている。「京の」とは、  
女の身の上を知る郡司のつけた呼び名であるが、同じ使用人たちに  
は、無能なほしめを意味する蔑称ではない。痛烈である。新任  
の国守が下向し、饗応の支度に立ち働いている「京の」に目をとめ  
る。郡司は女を湯に入れ、髪を梳かせ、装わせて、館に参上させよ  
うとする。にわかに身辺の美しくなるのを見て、女は、脳裡に本来  
の「京の」をよみがえらす。回想部にはいるのである。

彼女は、中務大輔と云ふ中務省の次官と云ふ中務省の次官で正五位下の位を所持  
する、由緒のある家に生まれた、娘只独りの一粒種であつた。

進行する現在時から、いったん生い立ちの原点に戻り、順次に来  
歴を語つて、現在時に及んでくる。整然たる時間処理の構造軸が、  
説話群のオムニバスの構成を組む作品に、生じやすい混乱を押えて  
有効である。「この中務大輔の家は貧しかつたので、この貧乏から  
娘を世に立てる事がむづかしかつた」と、物語ると、

《京に、宗岡の高助と云ふ人があつた。(以下略)

唐突に、『今昔物語集』巻第三十一「大蔵ノ史生宗岡ノ高助、  
傳ノ娘ノ語第五」の大量採用に展開する。伏線も、必然性もない別  
説話の出現に、うろたえざるを得ない。が、——。微官のわが身は  
貧しくとも、不相応に豪邸を構え、娘二人だけに贅をつくして養  
育し、権門勢家の將來性のある貴公子にめあわせようとする深慮の  
物語だ。言うまでもなく、父の「中務大輔」と「大蔵史生宗岡高  
助」とは別人である。高助の愚かしさに憫笑しえても、子を思つて  
「娘を世に立てる」、父親気質の一般という真情を提示して、作品  
の根幹に接膚する。粗暴な他説話の導入は「中務大輔」像に、な  
ま／＼しい立体感を付与しよう。「娘」のもとに「兵衛佐にながし  
と称する、兵衛府の次官で同じ五位の武官が婢」となつて通う。

「兵衛佐といふ官人については、かやうな事をした一人があつ  
た」と、巻第二十六「兵衛ノ佐ノ上綴ノ主、於西八条見得銀語  
第十三」の説話を採用して、例示する。利財、蓄財に敏な、いわ  
ば同名異人の物語である。ぬけ目なさや、目先の利くことは若い  
出世主義者に不可欠なものだつたのだから。貧しくて、後見のでき  
ない「娘」のもとを去り、後に国守に昇進した男を描く伏線に働  
く。

「娘」は両親を失ない、家運が傾いてくると、男に別れ話を切り  
出し、巻第三十「身貧シキ男ニ去ラシ妻、成撰津守妻語第五」を投  
入する。もちろん、この『大和物語』第四百十八で知られる「声刈  
り」は、作品のストーリーとは反対に女の栄達と、男の貧窮にいた

る物語だ。瀧井は意に介さぬらしい。飽かぬ別れ、再会それは永遠の別れの悲哀感を流しこむ。実際、この説話の登用によって、作品の方向ははっきり示唆される。

孤独な窮境に陥った「女」は、邸内に住みついた「年老タル尼」の手引きで郡司の子と会い、やがて近江の国に伴なわれて、下婢の境遇に落ちつく。物語は現在時を回復したのである。——「京の」は、国守の寢室に待るべき自身に気づく。今度は巻第十四「為救野干死ニダラシクハムシゴトニシラセラル」を語る。原話は若者と契つて、その男のために死んだ女、実は狐が法華経の功德により天女に生れ変わったという、靈験談である。女が狐の正体を現わし、あわれにも死んでしまう。その前半部を採っている。もとの「夫」に再会した、妻の末路を暗示するのである。従つて、作品の結末は次の通りで、冗語を弄さない。

(注、翌朝、近江守は女を下げた)郡司の許へは女を手厚くするやう沙汰があつた。郡司は又妻に事を申聞けた。其日から郡司が彼女に氣を付け慰めて、而して又夜は、女を守まもへ上げた。

一短篇小説が、さながら、説話集であるかの如き觀を呈している。特異な構造体の創始だ。量的にも、全篇のほぼ半分が、独自の興趣をそなえた四説話の領域である。それは芥川をよくする、例えば、「六の宮の姫君」では巻第二十六「東ニ下リシ者、宿人家ヒトノイヘニトシヨリ」値ニハル語第十九「や巻第十五「造悪業ツクリアク」人、最後ニ唱ウタ念ネン仏往生ブツジョウシヤル」語第四十七」中の片言隻語を利用して挿入し、奏効するのは大いに異なる。もとより、現代的解釈もさしはさまぬ。根幹原話の秩序

も、情緒も、ほとんど蹂躪してはばかりぬまでに見える、大規模の、生まな他説話の導入である。

「中務大輔の娘」の哀話に、表面的には点か、面かを接して、実は深奥部に機能する四説話を配置している。さすがに骨太の支柱は貫通して、いたずらな感乱は招かない。説話集という総体の中で、一説話を生かしてみようとする実験である。一説話を他の説話群に晒らして、より漂白しようとする実験である。主人公の倅せ薄い、数奇な生涯が、各説話の間に見えかくれしながら、綴られる。滑稽、諷刺、諧謔、逆説、怪異においても、侵蝕されず、純度の高まる哀情。読後の感銘はダイナミックですらある。

このような立体的、力学的、機能的な構成法は、俳人瀧井の、俳諧の付合の援用であるかも知れない。あるいは、芥川の「藪の中」の多面体の構想にならったのかも知れない。要は『今昔物語集』に対する受容の仕方である。——瀧井は原話にのみ集注していない。結晶度に欠けるそしりは免れまい。作品の統一性、完結性を代償としても、説話群という集合体に直参しようとするのだ。『今昔物語集』の自然其儘とする把握である。選択の論理を揮う芥川には対蹠点に立つ。

おそらく、この果敢な冒険の理解者は、芥川その人であつたに違いない。かつて、歴史離れを駆使して来たが、「六の宮の姫君」を主人公に取り立てて、原説話の自然其儘を試みてみる。所詮、鋭敏で、繊細な都会人には原話の残酷な悲劇性に堪えられないようだ。末尾、突然の「内記の上人」の登場と、「御仏を念じておやりなき

れ」とで、ついに自ら鎮魂歌をうたわざるをえない。遂行は挫折したのである。瀧井の獲得した「昔其ものの美しさ」は、領略できぬ彼岸だった。芥川の王朝今昔物は終わる。他に、天竺ものの「尼提」(大・四・九・一付『文芸春秋』第三年第九号)が巻第二「長者ノ家ノ淨尿尿管女、得道語第二十一」によって執筆される。

堀の「曠野」も師の「六の宮の姫君」の方法を祖述し、原説話に没入する。主人公「中務大輔の娘」、つまり「六の宮の姫君」の生の意義を、

自分を与へれば与へるほどいよいよはかない境涯に墮ちてゆかなければならなかつた一人の女の、世にもさみしい身の上話。

(「十月」より)

という、けなげな献身性に見出す。死に甲斐を与えて、葬ってやっただのである。

晩年の菊池寛が暢達、自在に語る「新今昔物語」中の一編、「六宮姫君」は優しい講読である。ヒューマンな心情が流れて、このシリーズで白眉の好短篇になっている。——「新今昔物語」とは文字通り、今は昔の物語である。江戸時代以前の奇談、逸話を指す。ことごとしく、『今昔物語集』の説話を典拠とした、現代小説化を意味していない。「六宮姫君」は、比較的原典に即している方である。が、この博識で、通俗的な現実家の描く説話は、太平洋戦争の戦前、戦後を分けて没落貴族のたどる、悲惨な経済生活の破綻を軸としているようだ。愛し合う者が遠く、永い離別を余儀なくし、残された女は耐乏、忍苦を強いられ、乞食同然で生きのびる。再会の

喜び、その「激情の発作には、その痛み疲れた身体が堪えなかつたのであろう。喜びのすゝり泣きと思われた声が、だん／＼病苦のうめき声に変わり、男が気がついて介抱を始めたときは、もう肩で呼吸をしていた。」(『好色物語』による。「苦楽」誌上の表記は歴史的かなづかい)

旧友芥川の「六の宮の姫君」から数えても、すでに二十五年を経過している。風化は覆うべくもない。瀧井・芥川・堀らの芸術的「修羅道」について、菊池の言及の有無は知らない。

芥川没後五十年に寄せて、瀧井は、その標題も「芥川さんの置土産」(昭五一・八・一付『文芸春秋』第五十四巻第八号)とする一文で次のようにいう。

芥川さんとは、私は大正八年四月から、田端の書齋の定連になつて、私は小説を書く手ほどきを受けた。日本の古典の中で、今昔物語を教へられたことは身に沁みこんだ。私は今昔物語を小説の手本とした。簡潔な文章で、千年も前のむかしの人の心持や事物が、活き活きと生々ましく描かれて、何度読んでも新鮮で大好きになつた。これは芥川さんの大きな賜物と思ふ。

「中務大輔の娘」は芥川「六の宮の姫君」、堀「曠野」、菊池「六宮姫君」を先導し、牽引する。しかし、これらの作品群は瀧井のものも含めて、やはり、「六の宮の姫君」物語の系譜をなすと、厳密には言わなければならぬ。